

付編

博多遺跡群出土の朝鮮陶磁器

— 17・20・22次調査より —

吉岡 完祐

博多は古くから、対外交渉の港として栄え、すでに759年にはその名が『続日本紀』に見出される。以降、大宰府の外港的役割をはたし「大宰府博多津」と称され、時代によって「那ノ津」「冷泉ノ津」「袖ノ港」などと呼ばれてきた。この貿易港としての性格から、旧博多区域の地下には、中世都市の諸様相を留める遺構が多く残されている。このため遺跡からは、中国産を主体とした朝鮮・安南などの陶磁器が多数出土する。今回の調査は、連歌師飯尾宗祇の『筑紫道記』で知られる、浄土宗「竜宮寺」を中心とする祇園・冷泉町一帯の区域で行なわれた。¹⁾

筆者は従来より、東北アジア交流史の一環として朝鮮陶磁器の起源論とともに、その生産と流通の問題に取り組んできた。²⁾だが最近まで資料の不足から、推測の段階に留まざるを得なかつた。だが今回、博多遺跡群の調査に参加することによって、博多に移入された朝鮮陶磁器について、ある程度の把握が可能になった。この結果、高麗青磁の起源論とともに、日本の唐津陶器を李朝陶磁器と比較することによって、その出現時期についての新たな見解が出来るようになった。なお、朝鮮陶磁器の鑑定には、韓国の鄭良謨氏（慶州博物館長）・尹龍二氏（圓光大学校助教授）の援助を頂いた。また福岡市教育委員会 折尾学・柳沢一男・杉山富雄氏等には、多くの便宜を計って頂いた。

朝鮮陶磁器の分類

博多遺跡群から出土する朝鮮陶磁器は、時期的には高麗青磁から李朝の粉粧沙器（粉引・堅手）まで幅広い。種類別では、高麗青磁素文4個、象嵌青磁6個。また李朝では、象嵌粉青沙器5個、粉青沙器（三島手）15個、刷毛目9個、粉粧沙器22個、白磁14個の計75個である。17・20次遺跡は、遺構に旧博多駅による破壊があることと、竜宮寺から南へ400m程内地側へ離れているせいか、遺物は10点前後と少ない。出土品の大部分は、22次（旧天福寺）遺跡からの出土である。なお朝鮮陶磁器の編年については、古くは浅川伯教・奥平武彦氏等、最近では崔淳雨・鄭良謨・西谷正氏等が行なっている。本稿では、これらの編年を踏まえて分類を行なう。遺物の詳細は、分類表に集成した。

出土遺物の形態

1～4は高麗青磁の素文である。1・2の碗は、全面に施釉された蛇目高台である。高台の畳付面のみ釉がふき取られ、鉄足化して赤褐色を呈する。釉調は浅緑色をなし、体部がやや脹らむ。目痕は、畳付に耐火度がわずかに残る。2の碗は、1に比べて高台の幅が狭くなり、内面頂部に「彦」の文字が陰刻されている。3の碗は、釉調がやや暗緑色を呈し、体部の厚みが増している。輪高台の目痕は土の荒い混ぜ目である。4の碗は、ややオリーブがかかった暗灰緑

色を呈する。体部表面は、火力不足の為か、斑釉になっている。高台の部分は竹ノ節状で、畳付面は幅に変化があって三ヶ月状になっている。

5～10の象嵌青磁は、7を除いて白・黒の象嵌である。5の瓶は、残された上部から白土による一条の線と、斜めの平行線が巡る。その下に白土による円の中に黒土を施された連珠文が巡る。6の瓶は、白土の平行線。8の鉢には、白土による三本の平行線に黒土による象嵌が部分的に残る。9の破片は、表面に白土による平行線・平行斜線・直角平行線など、内面は白・黒土による乱線である。10は、一面に黒・白土による千鳥状をなす。

11・12は、暗灰緑色の釉調を呈する象嵌粉青沙器である。2個とも碗と考えられるが、白土による印花文と同質の連珠文や、菊花文が象嵌されている。

13～21は粉青沙器、いわゆる三島手である。13は碗と思われるが、灰色釉の屈曲する体部に、見込みと高台部分を除いて全体に白土化粧を施している。外面は縄簾文、内面は上方に平行草文と縄簾文、無地の見込みには白象嵌で、「金海」の文字が一部残る。14の碗は、外面は暗灰色釉の上に白土によって唐草状の文様が荒いタッチで描かれ、内面は白化粧に小さな印花を施している。だが火力不足の為か、内面は白濁化している。高台内面は頂部に押痕が残り、白土が部分的に付着する。15は壺と思われるが、体部に幅のある荒い白土の圈線文が重なる。16の碗は灰色釉の上から、外面は白土によって荒いタッチで傾斜平行線が描かれ、部分的に刷毛目が残る。内面は全面を白化粧して、平行した連続縦線が巡る。17・18は鉢と思われるが、文様は平行線と縄簾文からなる。19の瓶の首部は、1本の白推線で区切り、上下に細かい印花文で隙間なく埋めている。20の碗は、内面中央に菊花文が押刻され、周囲と外面上部に小さな菊花文が縄簾文状をなす。21の皿は、幅広に白象嵌された連続圈線文をなす。

22～24は刷毛目である。22の小碗は、いわゆる無地刷毛目で、暗緑灰色釉の上から濃度の薄い白土水に浸して、内面及び外面上部のみに均一の薄白釉を掛けている。23・24の碗は、灰色気味の釉の内外面に部分的な刷毛目を施している。

25～32は粉粧沙器、いわば粉引・堅手などと称される施釉陶器である。25はやや硬質の粉引手碗で、喫茶用としても使えるが、体部の脹らみが足りない。26は典型的な高麗茶碗である。口縁部に2ヶ所、高台に1ヶ所打ち傷があるが、完形品である。体部はゆるやかに脹らみ、竹ノ節状に削り出された高台は畠付が三ヶ月状をなし、内面は兜巾になっている。見込の茶溜の上には4個の小さな目痕が残っている。さらに体部の一部に、釉の外れた褐色の素地を残して、火間をなす。27～32の皿は無地の施釉で、胎土は精練された白磁に近いものから、やや荒めのものまである。目痕は、土目・混ぜ目・砂目などがある。高台は普通の輪高台から、畠付の内縁が退化して上げ底になるものもある。

33～36は白磁で、33は軟質の帶黃白色をなし、目痕は砂目である。他の白磁は、帶青灰白色的釉調で、目痕は同質の土を使用したのか、剝離痕が大きく残る。目痕の数も、4～8個と差がある。

出土遺物の年代

博多遺跡群出土の朝鮮陶磁器の年代については、研究者によって年代間の違いがあるが、今回は韓国の鄭良謨・尹龍二氏等と検討を加えて、大体の概略を行なった。

1～4の高麗青磁は、10～11世紀代のものと考えている。1～2の高麗青磁は、浅緑色の釉で体部がやや丸く脹らむ。また蛇目高台の幅が狭くなり、とくに2の碗は退化した状態を示す。これに類似するものが、全羅南道康津郡大口面龍雲里付近の窯址から出土している。高麗青磁における蛇目高台の継続時期については、現在でも推測の段階を出ないが、窯址の調査経験から鄭良謨氏は11世紀初頭、尹龍二氏は11世紀中頃迄と考えられている。筆者については、窯址の調査（表採）から、後期の蛇目高台が割花・陽刻・輪花・押形文等とともに採集されることから、11世紀中頃と考えていた。しかし1980年、龍雲里第10号陶窯址が貯水池の建設に伴ない、韓国国立中央博物館によって発掘され、蛇目高台の青磁と一諸に「尚藥局」銘の薬通青磁などが出土し、時代を異にする窯址が4基検出されている。また1982年、十郎川遺跡から出土した500点余の越州窯系青磁の一部を、大口面採集の高麗青磁とともに京都大学に胎土分析を依頼した。この結果、高麗青磁の蛇目高台と一緒に採集される陽刻文と同系の皿には、蛍光X線分析の一つであるクラスター方式の分析樹に差異があり、一括採集品が同時期の窯址とする根拠が失なわれた。さらに1983年中国の馮先銘氏から、後期の蛇目高台と一緒に採集した一部の高麗青磁の文様は、中国では12世紀の範疇に入るとの指摘を受けた。このような結果から、高麗青磁における蛇目高台の下限については、11世紀前半、それもかなり前葉との感触を得ている。

3の碗については、混ぜ目の目痕に特徴があり、同形のものが龍雲里巷洞などの窯址から出土しており、11世紀頃と推定されている。

4の青磁は、最近まで日本の研究者によって、越州窯系青磁と見なされてきたものである。しかし筆者は、高台の部分が朝鮮独自の竹ノ節状で、疊付面が三ヶ月状をなしていることから、高麗青磁との見解を捨てきれなかった。はたして、近来精力的に陶窯址の踏査を行なっている尹龍二氏から、釉調・器形・胎土との比較から、同質の青磁が全羅北道高敞郡雅山面龍溪里窯址から出土しているとの教示を受けた。これは十郎川遺跡出土の青磁片の中に、高麗青磁が存在するとの京都大学による胎土分折とも一致するものである。今後とも、越州窯系青磁について生産地の擬問なものには、さらに胎土分折などの必要を感じる。

5～10の象嵌青磁は、文様の反復と単純化が窺われることから、高麗青磁の衰退期に当る、13～14世紀代のものと考えられる。

11・12の象嵌粉青沙器は、高麗末期から李朝初期の過渡的なものと見られる。

13～21の粉青沙器は、主に15世紀代に焼造されたもので、末期になると文様に刷毛目が加わり単調になる。13の見込には、白象嵌によって「金海」の文字が一部残されている。この碗と同質のものが、慶尚南道金海郡上東面大甘里窯址から出土している。このことから、15～16世紀代に日本に輸入された朝鮮陶磁器の主体は慶尚道で生産されたことを示している。事実、当時の『世宗実録』地理志に、慶尚道は朝鮮最大の焼造地で、磁器所37ヶ所・陶器所34ヶ所の計

71ヶ所が存在し、記録とも一致する。

25~32は、粉引・堅手などの施釉陶器で、胎土・器形から大部分が16世紀代の年代に入るとと思われる。目痕については、土目・混ぜ目・砂目などがあり、目痕による年代的区分は困難で、実質的には生産地による分類が考えられる。

ところで31の皿などについて、鄭良謨氏から、幾つかの指摘を受けたので述べてゆく。高台疊付面の内縁が退化して、内面高目の器形が平高台に近くなるものは、李朝陶器でも17世紀の範疇に入ることである。また26の碗は20次調査の際、隣接するビルの溝工事で、江戸期の共伴遺物と一諸に出土したものである。小さな打ち傷があるが、手に丸く収まる胴の脹らみなど、喫茶用の茶碗としての条件を整え、粉引手の逸品である。しかし鄭良謨氏は、喫茶用の茶碗としてはあまりにも条件が揃いすぎており、持った感じが他の粉引手茶碗に比較して軽い。従って、日本からの注文品ではないかとの指摘をなさっている。確かにこの茶碗は、打ち傷に見える胎土がやや軟質の赤褐色土で、他の粉引手とは異なる。出土層の違いからも、おそらく釜山地方で焼造された、高麗茶碗と考えられる。

朝鮮陶磁器出土の意義

今回の調査で明らかになった朝鮮陶磁器において、多くの諮詢に富んだ問題が見出されることになった。とくに22次（旧天福寺）の調査では、ほぼ南北に延びる小溝（301号）から、「金海」銘の粉青沙器など良質の遺物が出土し、博多における15世紀代の輸入朝鮮陶磁器の一端を窺い知ることが出来た。さらに遺跡から出土した、最も古い蛇目高台の高麗青磁と、最も新しい李朝の粉粧沙器については、現在まで推測の域を出なかった東北アジアの陶磁器交流について、別な見解が出せるようになった。この小論は、今回出土した朝鮮陶磁器を吟味することによって、陶磁器編年の問題を、新しい視点から再検討を行なうものである。

高麗青磁の起源について

高麗青磁における起源論については、現在2つの説がある。1つは崔淳雨氏等の説で、新羅土器と高麗青磁の過渡期のものとして、京畿道仁川市北区景西洞の綠青磁を考えられ、後三国時代から高麗王朝が成立する9世紀末から10世紀前葉に高麗青磁が出現した、とされている。他の一つは尾崎洵盛氏の説で、越州窯青磁の完成された時代と、当時の新羅と唐との交流関係から見て、新羅の元聖王12年（796）頃にはすでに焼造が始まり、興德王元年（826）頃には青磁として完成されていたと、推測されている。⁹⁾

この発生問題の擬問を解くため筆者は1977年以降、全羅南道康津郡大口面・七良面に存在する、蛇目高台の青磁窯址30余ヶ所の調査を行ない、次のような作業を試みた。蛇目高台青磁碗の器形変化、素文から劃花・蓮弁文などへの転換、匣鉢に残る窯印の変化と消滅時期、青磁を置く台や抬^{はせ}の変化、並行して残る10基前後の土器窯址、新窯址から見込に「當院」銘のある蛇目高台青磁の採集、そして826年～846年にかけて東北アジアの海上交易を独占した張保皋の清海鎮（莞島）の影響下に存すること。これらの諸々の関連から、1979年の論文で筆者は次のよう

な考察を発表した。その要旨は、「816年頃、憲徳王の時代に続発した天災地変によって生活の手段を失なった民衆は、流民または奴婢として越州窯のある浙東地方に渡って行った。その数は文献によると、数万人とも想定出来る。その中には、当時下層階級の職業であった陶磁器の製作に従事して、技術を習得した者達がいたと考えられる。その後、唐政府は823年と828年に新羅人奴婢解放令と売買禁止令とを発布している。自由の身になった陶工達は、陶磁器の交易によって利益を得ようとする張保臯の求めに応じて、莞島から10数キロの龍雲里に移住したとも考えられる。その後、張保臯の暗殺によって後援者を失なったため、再び高麗の保護を受けるまで、小規模の窯を維持したと推定される。」

この論文の発表の後で、韓国で幾つかの発見がなされている。新羅土器と高麗青磁とを繋ぐものとされた、仁川景西洞窯址の綠青磁と同質の綠青磁窯址が、昨年李龍熙氏によって大口面龍雲里盜賊窟上方で、蛇目高台の青磁窯址 2 基とともに発見されている。また先年尹龍二氏は、龍雲里第 9 号陶窯址の試掘で、割花・蓮弁文の青磁とともに景西洞窯址出土と同形の馬蹄形陶枕（置台）を発掘されている。このような結果から、仁川景西洞窯址の年代については、再考の必要がある。また鄭良謨氏によると、1983年韓国TBSの報道員が、莞島の調査で越州窯青磁を 2 個採集している。莞島は張保臯の死後、反乱を恐れた新羅政府によって851年来、無人化している。これは、9世紀前葉の交易品としての、越州窯青磁の存在を示すものであろう。

また筆者も1979年8月、慶州皇竜寺出土の陶磁器を、調査担当者崔乘鉉氏の御好意で分類を行ない、数万点の破片から、越州窯青磁19個、唐三彩2個、長沙銅官窯1個、邢州窯白磁2個を検出した。だが不可解なことに、越州窯青磁は9世紀代の特徴を示し、それ以降の青磁は見出されない。そのかわりに、蛇目高台の高麗青磁が40個検出されている。これは現在、鄭良謨氏が再調査をなされている、雁鴨池出土の越州窯青磁も同じ傾向を示している。これらの結果によって、最初に焼造された青磁は、まず国内の需要を満たし、日本などへの輸出は特殊な例を除いて、大量に生産されるようになる高麗時代からとも考えられる。

なお越州窯青磁の影響については、日本においても年代間の違いがあり、猿投窯白瓷陶器の出現については、10世紀前半とする説と¹¹⁾ 9世紀中頃とする説による、論争がなされている。

唐津陶器の出現について

古唐津の創業については諸説があるが、現在では室町後期の15世紀開窯説に、焦点が絞られつつある。この説は、古唐津を松浦水軍による「倭寇貿易」の一端として捉え、岸岳古窯には北朝鮮会寧地方の、割竹式諸窯の陶技が移入された、との推測をなしている。

しかし今回、博多遺跡から出土した李朝陶磁器は、15~17世紀初頭まで連続しており、古唐津との共存には矛盾を感じる。また、今日までの文献や発掘資料の運用には疑問な点が多い。以下、著者が疑問に思う項目を列記して、後の再検討を待ちたい。

(I) 会寧窯は李朝後期 会寧窯址を発掘なされた浅川伯教氏は、咸鏡北道会寧郡雲頭面細洞第1窯址を、李朝後期となし古唐津に似ると記している。¹⁴⁾ また他の会寧釉窯址も、李朝中期・後期・時代不明とある。また割竹式窯は李朝後期まで継続しており、現在も解明されていない。

(2) 松浦水軍による倭寇 16世紀代の松浦水軍は、倭寇から転身して「中継貿易」に努めた。とくに1510年の「三浦の倭変」以降、対島の宗氏が朝鮮貿易の管理を強め、1544年の慶尚道蛇梁など数件を除いて、倭寇による襲撃・略奪は無くなつた。さらに1572年以降、宗氏の監視の下、交易船は毎年80隻に上り、そのうち松浦一族は10隻前後を占めた。¹⁵⁾

(3) 『肥前產物図工』古唐津の問題は、江戸時代には無く、明治時代後半に茶道の隆盛に伴なつて始まる。それゆえに、文禄・慶長の役以前の唐津に関する文献は存在しない。岸岳城の落城による陶工達の逃散、いわゆる「鬼子嶽崩れ」¹⁶⁾などの言葉は、最近の造語と考えられる。

(4) 古唐津の多様性 初期の唐津陶器には種類が多いが、唐津には寺沢氏が隣行した陶工以外にも、関ヶ原の戦で滅んだ小西行長等の茶人大名達が連れ帰った陶工等もいたと思われる。その多くは、帰港地たる唐津に取り残されたとも考えられる。

(5) 遺跡出土の唐津陶器 昨年9月、青山学院大学で貿易陶磁研究会が行なわれた。その際、文禄・慶長の役以前の唐津陶器を出土した遺跡の調査担当者に出土状況を伺つた。しかし、その多くが相対的なものであった。かえつて、1573年以前の一乗谷朝倉氏遺跡、1585年以前の根来寺坊院跡などの無人化した遺構からは、唐津陶器は検出されない、とのことであった。¹⁷⁾

(6) 上野・高取窯と古唐津 筆者は1978年、唐津岸岳皿屋窯址ならびに高取山田窯址（唐人谷）出土の、粗製白濁長石釉の輪花皿を実測した。驚いたことに、器形ならびに高台内を一回転して削る技法など、同一人物の作かと思われた。このことは、内ヶ磯窯址から斑唐津と類似のものが出土することから、寛永年間に焼物師として高取窯に参加した、肥前唐津寺沢家浪人五十嵐次左衛門の存在が指摘出来る。¹⁸⁾

以上のように、唐津陶器の出現には多くの疑問が存在する。今回の博多遺跡群の調査から、17世紀初頭の李朝粉粧沙器が出土したことは、唐津陶器の出現を、文禄・慶長の役以降とする佐藤進三氏の説が考えられる。なお、詳細については、別稿で述べたい。

〔註〕

- 1 吉岡完祐 『高麗青磁の発生に関する研究』 韓国崇田大学校博物館 1979
- 2 吉岡完祐 「越州窯系青磁の形態分類から見た高麗青磁との比較」『十郎川 一』 住宅・都市整備公団 1982
- 3 浅川伯教 「朝鮮の窯跡と採集品の記録」『世界陶磁全集』14 李朝 河出書房 1956
- 4 奥平武彦 『陶器講座』 李朝 雄山閣 1937
- 5 崔淳雨 「高麗陶磁の編年」『世界陶磁全集』18 高麗 小学館 1978
- 6 鄭良謨 「李朝陶磁の編年」『世界陶磁全集』19 李朝 小学館 1980
- 7 西谷正 「九州・沖縄出土の朝鮮陶磁器に関する予察」『九州文化史研究所紀要第二十八号』 1983
- 8 清水芳裕・菱科哲男「十郎川遺跡出土高麗青磁の識別(胎土の蛍光X線分析)」『十郎川 一』 住宅・都市整備公団 1982
- 9 崔淳雨 前掲5
- 10 尾崎海盛 「高麗青磁の起源に関する問題の考察」『陶説』 1960 1・4・5・6・7月号
- 11 楠崎彰一 「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡分布調査(III)尾北地区・三河地区』 愛知県教育委員会 1983
- 12 高島忠平 「平城京東三坊大路東側溝の施釉陶器」『考古学雑誌』 第57巻1号 1971
- 13 永竹威 「古唐津の系譜と造形美」『古唐津(肥前陶器の歴史と美を探る)』 佐賀県立博物館 1983
- 14 浅川伯教 「李朝陶磁窯跡一覧表」P255 『世界陶磁全集』14 李朝 河出書房 1956
- 15 『朝鮮途使國次之書契覺』『九州史料叢書』 九州史料刊行会編 1955
- 16 中島浩氣原著 永竹威編 『肥前陶磁史』 P27 名著出版 1955
- 17 「貿易陶磁研究」 No.4 日本貿易陶磁研究会 1984
- 18 磯村幸男「高取焼関係史料調査について」 P180 『(古高取)内ヶ磯窯跡』 直方市教育委員会 1983
- 19 佐藤進三「唐津陶の種類」『唐津』陶磁叢書第二巻 日本陶磁協会 寶雲社 1947

朝鮮陶磁器一覧

No	出 土 遺 構	器 形	器 種	年 代	法 量 (cm)			釉 調	胎 土	焼 城	特 徵
					口 径	器 高	底 径				
1	22・516号	碗	高麗青磁	10C		3.9		帶青淺綠色	灰白色	良好	蛇目高台
2	22・387号	〃	〃	10~11C		4.0		淺綠色	灰色	〃	外底部上面「彦」陰刻
3	17・SK248	〃	〃	11C		5.2		暗綠色	灰褐色	〃	目痕土は混ぜ目
4	22・IV層	〃	〃	〃		5.6		帶褐灰綠色	淡褐色	やや良好	表面全体に釉斑
5	22・IV層D2区	瓶	〃	13~14C				淡綠灰色	灰白色	良好	白・黒の象嵌
6	17・SE16中層	〃	〃	〃				帶青暗綠灰色	灰褐色	〃	〃
7	20・SD24C-4	〃	〃	14C				帶黃綠灰色	〃	〃	二本の白象嵌線
8	17・SK27	(鉢)	〃	〃				帶青綠灰色	灰色	〃	白・黒の象嵌
9	20・SD317	〃	〃	〃				綠灰色	灰褐色	〃	〃
10	22・III層面B4区	〃	〃	〃				〃	〃	〃	〃
11	22・460号	碗	象嵌粉青沙器	14~15C	11.0			帶綠暗灰色	灰色	〃	白の圓線文・連珠文による象嵌
12	22・トレンチ	〃	〃	〃	13.6			帶綠灰色	灰褐色	〃	白の圓線文・印花による象嵌
13	22・301号	〃	粉青沙器	15C		4.6		灰 色	灰白色	〃	白の草文帯と連珠文の象嵌 見込に金海の文字残る
14	22・462号	〃	〃	〃		6.0		暗灰色	赤褐色	不 良	内面の白象嵌が融化して 文様不明
15	17・SD24	〃	〃	15~16C		9.8		帶白綠灰色	灰 色	良好	疊付全体に砂目
16	22・301号	碗	〃	〃		5.6		帶青灰色	灰白色	〃	内面縦に平行刷毛目 外表面に二重の平行刷毛目
17	20・SK390	(小鉢)	〃	15C	9.2			帶青暗綠灰色	灰褐色	〃	白の圓線文と繩籠文の象嵌
18	17・SD24	〃	〃	〃				〃	灰白色	〃	白の繩籠文象嵌
19	20・SK423	瓶	〃	〃				帶青灰色	灰 色	〃	白の印花象嵌
20	22・III層面	碗	〃	〃		5.8		帶綠灰白色	灰白色	〃	中央に菊花文 周囲に印花状、繩籠文象嵌
21	22・III層	皿	〃	15~16C		5.2		帶青灰色	赤褐色		内面に同心円状の象嵌
22	22・306号	小碗	無地刷毛目	16C	10.0	3.6	5.1	帶青暗綠灰色	灰黑色	不 良	内面と外面上部に薄い白の 刷毛目、内、外間に砂目痕
23	22・301号	碗	刷毛目	16C	12.4	5.2	4.6	帶青灰褐色	灰白色	良好	内面一部と外面上部に刷毛目
24	22・トレンチ	〃	〃	〃	13.8	5.8	5.6	帶青灰色	暗灰色	〃	内外面上部に白刷毛目 骨付の目痕はかき落している
25	22・508号	〃	粉 糙	〃	14.8	7.5	5.6	帶黃白色	白 色	〃	内面砂目痕4個 疊付の目痕はかき落し
26	20・表採	〃	〃	17C	13.2	6.6	6.0	淡黃白色	淡褐色	〃	内外面の砂目痕をかき落し 内面に4個
27	17・SD25	皿	〃	16C	10.8	3.6	4.6	帶褐灰色	灰 色	〃	目痕は混ぜ目で、内面5個 底部4個
28	17・P572	〃	〃	〃	9.4	3.9	3.8	暗灰色	〃	〃	内外面の目痕は4個の上目
29	17・包含層	〃	〃	〃				〃	〃	やや良好	内面に砂状の目痕
30	17・SX15	〃	〃	16~17C				4.4	〃	良好	目痕は内外面に4個の上目
31	22・表採	〃	〃	〃				4.8	帶青淡褐色	淡褐色	〃
32	22・表採	〃	〃	〃				4.8	淡褐色	〃	目痕は砂目
33	22・表採	〃	白 磁	15~16C	10.6	3.3	4.8	帶黃白色	白 色	〃	砂目痕
34	22・IV層	〃	〃	〃	12.3	3.3	4.2	帶青灰白色	〃	〃	目痕は同質土の可能性
35	17・SK220	(碗)	〃	〃				5.2	帶青灰色	灰白色	やや良好
36	22・III層面	(皿)	〃	〃				4.6	帶青灰白色	灰 色	良好

出土地点の17・20・21・22は調査次

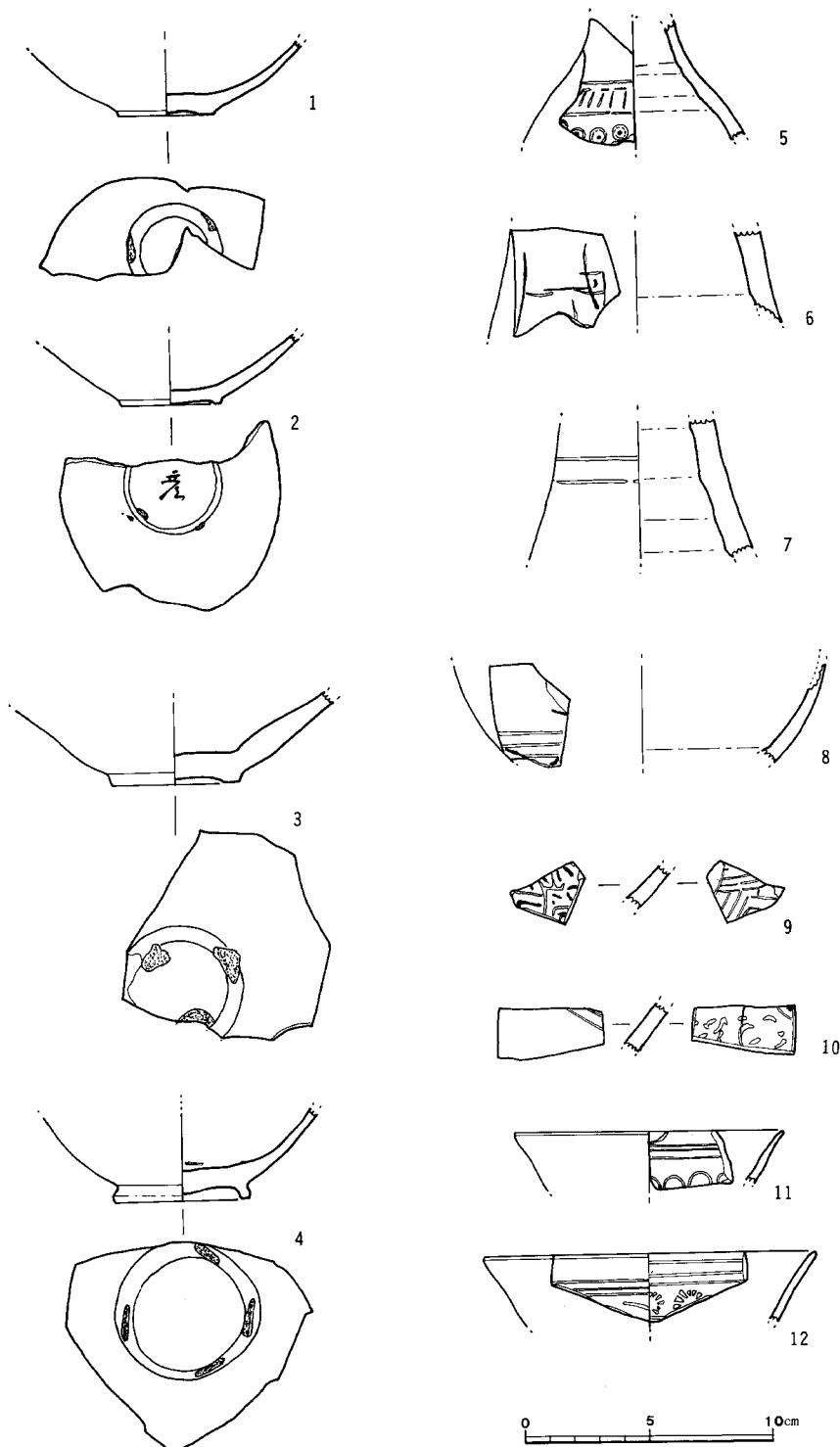


Fig. 60 朝鮮陶磁器実測図 I (1 : 3)

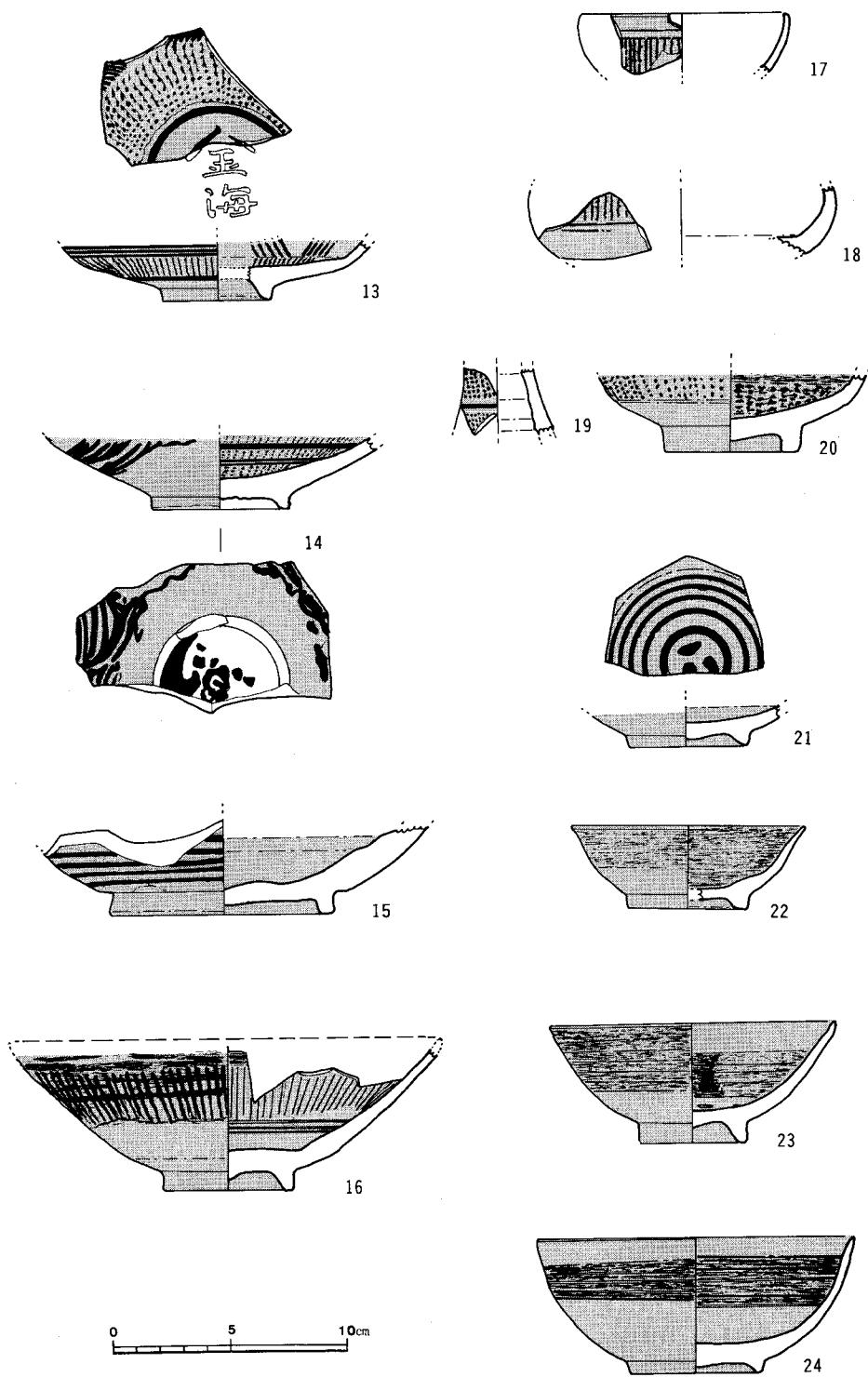


Fig. 61 朝鮮陶磁器実測図 II (1 : 3)

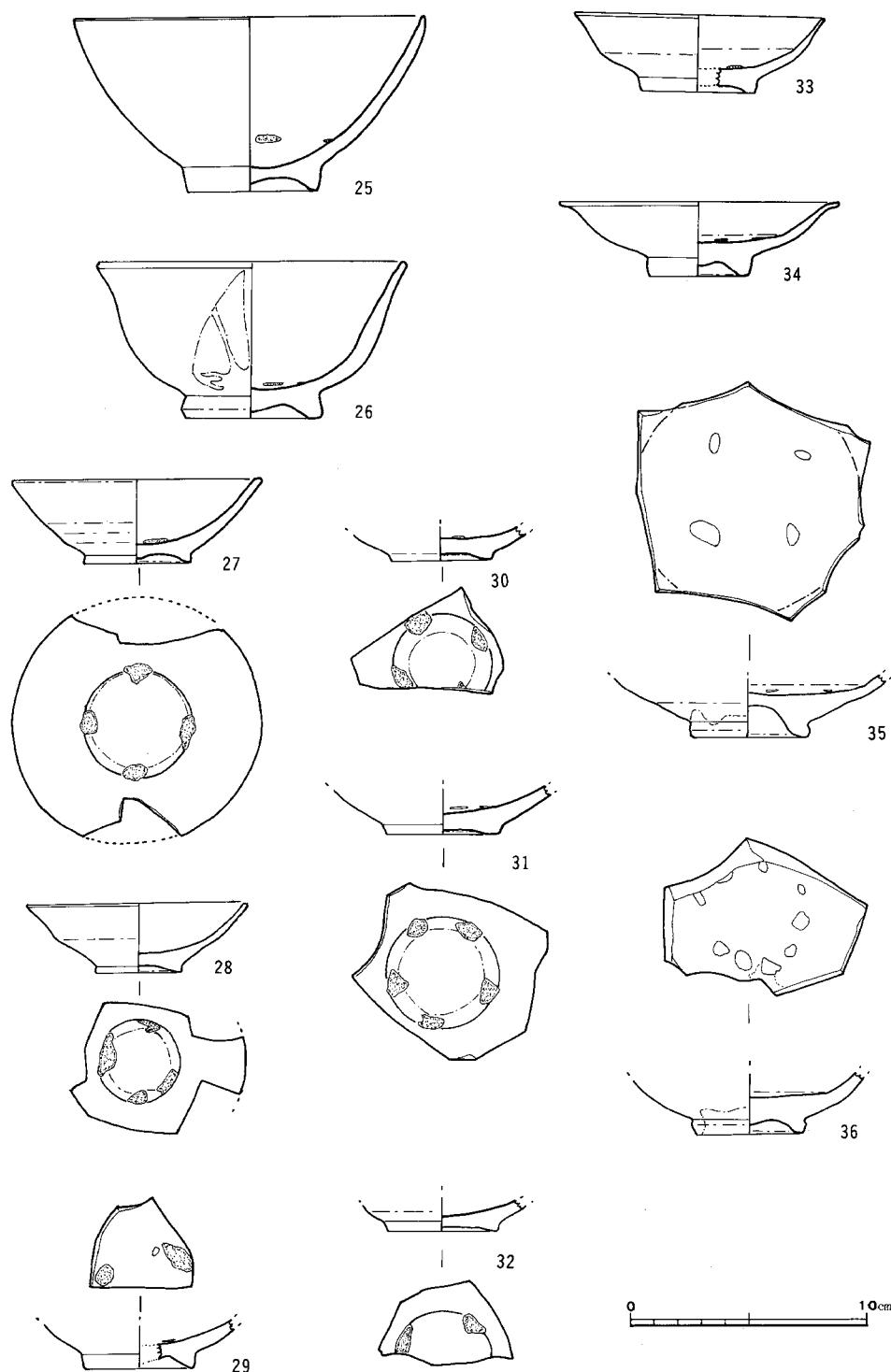


Fig. 62 朝鮮陶磁器実測図III(1 : 3)

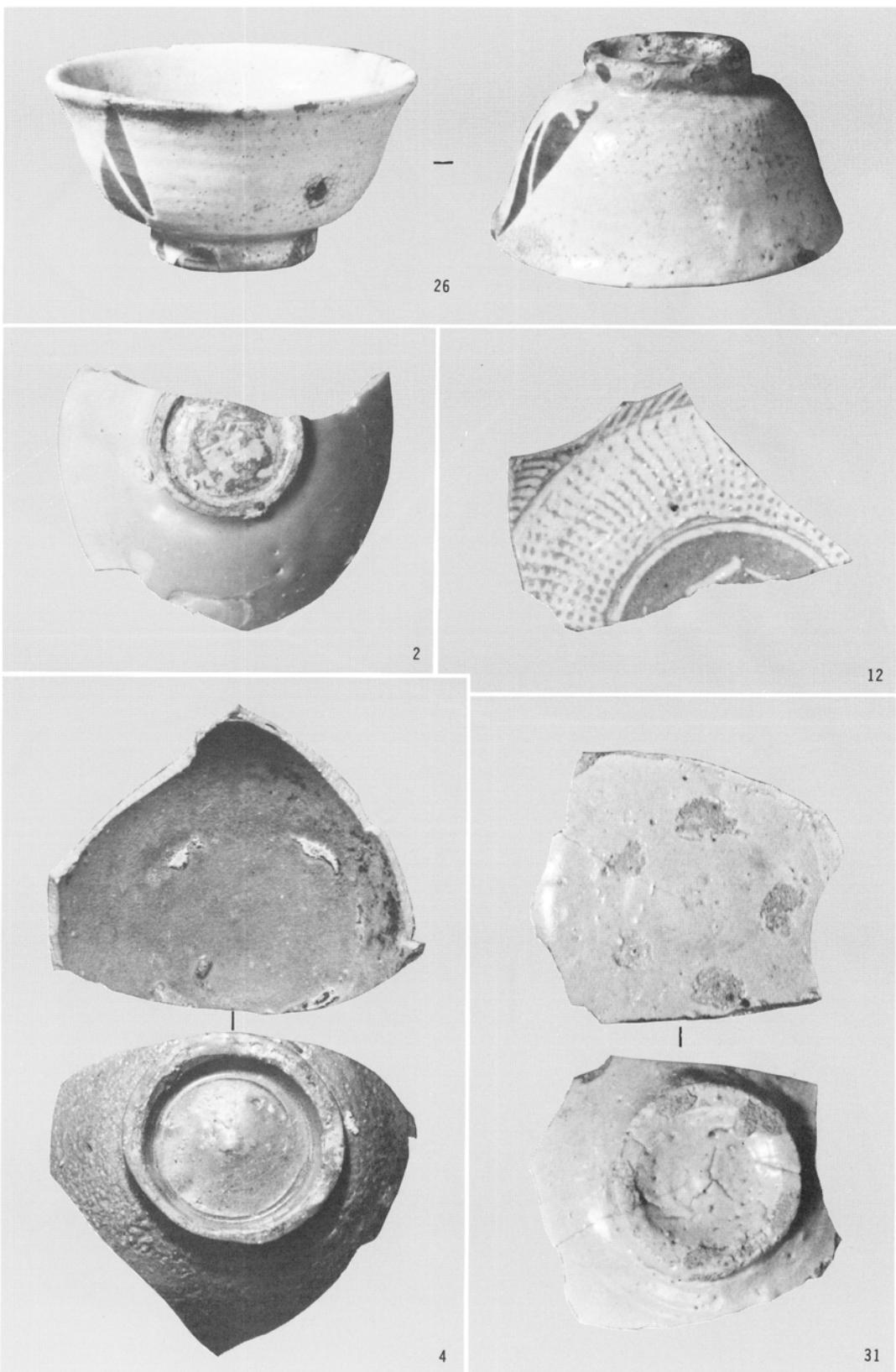


Fig. 63 朝鮮陶磁器 I

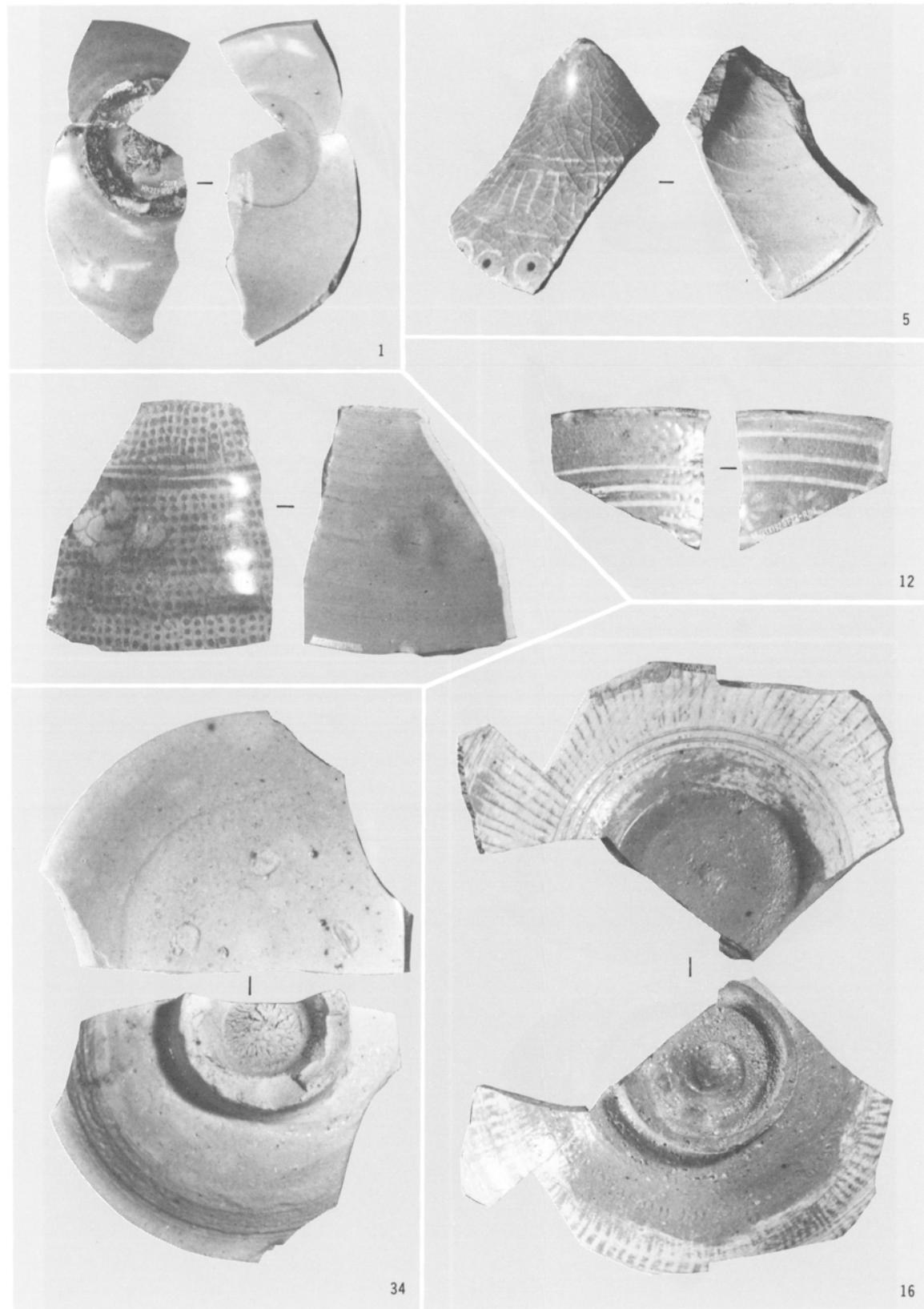


Fig. 64 朝鮮陶磁器 II